
ボクハ アタカモ フツウデ アルカノ ヨウニ

御剣剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクハ アタカモ フツウデ アルカノ ヨウニ

【NZコード】

N1821E

【作者名】

御剣剣次

【あらすじ】

酷い境遇の中で、ついに自分が抑えられなくなつた少年は……
精神的に病んだ作品です。病的なものが苦手な人は注意しましょう。

僕は、自分が不幸だと思ったことはない。いや、むしろ恵まれている。

黙つていたつてご飯は食べられる。寝ていたつて小遣いが貰える。これを恵まれていないと言うのなら、どのよつなときを恵まれていると言うのだろう。

僕はいつか、人を殺してみよう。腹を引き裂いて、内臓を抉りだし、一つ一つ手にトッテ ナイフヲ シキサシ ソシテ

「あなた、いい加減にして！ タバコは家では吸わないでって、何度も言つてるでしょう！」

母さんは飲食店の店員。午前勤務なので午後からは家にいる。

「煩い、どこで吸おうと俺の勝手だろう！」

父さんはサラリーマン。強い人には腰が低く、自分より弱いと思つた相手には強気になる。

また始まった。いつものことだ。タバコを吸う吸わないの論争だ。

母さんはタバコ嫌い。父さんはヘビースモーカー。

この口喧嘩が始まると、僕はいつも同じことを考える。

父さんの肺は黒いだろうか。タバコを吸うと黒くなるという。見てみたい。

母さんの内臓は綺麗なのだろうか。心臓はルビーのようなのだろう

うか。

殺してみたい。裂いてみたい。腹を引き裂いて、内臓を抉りだし、一つ一つ手にツッテ ナイフヲ ツキサシ ソシテ

学校では、僕は空氣より扱いがひどい。今日もまた、足を掛けられて、モップで押さえつけられる。

「バイ菌は殺菌しないとダメらしいな。ほら、消毒消毒！」
トイレ掃除用の洗剤をかけられた。その上からモップで塗り込んでくる。周りの生徒も面白がって指差している。
僕は、バイ菌じゃない。
もつともつと悪い。

悪魔だ。

「こつらはいつか殺す。そう決めている。
モップで押さえつけてくるやつも、その手下も、指差してくるやつらも、みんな。

今はまだ、僕は悪魔になりきれてない。なりきれた時、おまえらの人生は。

オワリナンダヨ？

僕にはおばあちゃんが一人いる。父さんの母さんだ。父さんや母さんの前では優しいおばあちゃんだけど、僕と一人きりだと酷いおばあちゃんだ。

「なにやつてんだい、愚図。わざわざお菓子を持つてこいー。」

お菓子を持っていく。

「違つたるー。」 こんなもの私が食べると思つてゐるのかー！ 本当に

愚図だねあんたは！」

叩かれた。叩かれてる。

硬い硬い、杖の先で。とても痛い。

殺す。殺す。
殺す。
殺す。
殺す。
。

コロス コロス コロス コロス コロス コロス コロス
コロス コロス コロス コロス コロス コロス
コロス コロス コロス コロス コロス
コロス コロス コロス コロス
コロス コロス コロス
コロス コロス
コロス。

ナヤム ヒツヨウ ナンカ ナイサ。 オバアチャンカラ サイシ
ヨニ コロセバイ。

僕の中で、僕の声が響いた気がした。

僕は恵まれていて、僕は恵まれていて。

だつて、殺したい相手が、こんなに、たくさん。

「おばあちゃん、肩を揉んであげるよ」

父ちゃんと母ちゃんとおばあちゃん。みんないる。僕が袖に包丁を持つることで、誰も気が付かない。

「あら、ありがとうねえ~」

おばあちゃんは優しいおばあちゃんを演じている。いや、そのまんまクロシテアゲル。

「悠斗?..!」

おばあちゃんの喉は、簡単に裂けた。骨は切れなかつたけど、肉はちゃんと切れた。凄いな、この包丁。テレビで言つてた通りだ。立ち上がつた父さんのお腹も引き裂く。メタボリックだった父さんのお腹も、面白いように簡単に切れる。手に、お肉を切る感触がある。キモチイイヨ トウサン。

お腹から溢れる内臓を、一生懸命出なつて押しとどける父さん。

次は、母さん。

ベツニ トウサンモ カアサンモ ワルイコトハ シティナイ。
タダ ボクラ ウンデ ソダテタ ダケ。ダカラ シンジャウン
ダ。

僕は、笑つてゐる。テレビは丁度、いつも夜七時にやつてゐる番組を放送している。

僕の周りは、赤い。父さんの肺は、やつぱりちょっと黒かった。母さんの内臓はとても綺麗だった。おばあちゃんの内臓は、どれも

薄汚い色をしている気がした。

僕は、母さんの心臓を手に取った。母さんは僕の初恋の人。大好きだった。でも、殺したかった。

僕は、母さんの心臓を一口、食べた。固い。簡単に噛み千切れなかつたけど、頑張って食べた。鉄と肉の味がした。気持ち悪くてすぐ吐き出した。

マダ タリナイ。ガツコウノ ミンナモ ロロシニ イカナキヤ。

僕が、僕に言つ。

外は寒いから、ちゃんとジャンパーを着て、靴を履く。

「行つてきます」

母さんの心臓にそづり言つて、母さんの心臓を母さんの靴の上に置いた。

みんなの家は知っている。僕が悪魔になつた時、みんなを殺せるようにするために。

まずはモップで押さえつけにきたやつからだ。名前はなんだったつけ？

ピンポン。僕の心臓はドキドキとしてる。

「はい、どちらさ……」

ドアが開いたから、多分首があると思つといひにナイフを突き出した。喉が切れちゃつた女のは、傷口を押さえながら中に戻ろうとした。

「お邪魔します」

そう言つて、僕は家に上がつた。廊下に出てきたあいつと目が合

つた。

「う、うわああああ！」

そう叫んだらあいつは、階段を駆け登って行つた。玄関に倒れている女の人はどうとう、死んじやつた。この人の内臓はアトニシヨウ。

逃げたあいつを追つて、僕も一階に上がる。

「た、助けて下さい！」「殺される！」

誰かに電話してる。多分、警察。

僕はドアを叩く。悲鳴が上がる。

僕はドアを蹴破る。あいつはおもちゃの剣を持っていた。

頭が痛い。僕はあいつの内臓を切り開きながら、そう思った。別に、殴られて痛いわけじゃない。ただ、なんか痛かった。

僕はそいつの内臓に飽きたから、次の相手に行こうと思った。次は取り巻きのやつら三人だ。一人はすぐ近くだ。

歩いて向かう。血まみれの僕を見た人が、警察に電話を掛けている。どうでもいい。

一人目の家に着いた。チャイムを鳴らす。

「はーい」

出てきた人は、高校生の男の人だつた。笑顔の喉に、突き刺す。その人はびっくりして、やつぱり中に逃げようとした。

「お邪魔します」

僕はやつぱりそう言って中に入る。人の家に入る時はそういうなさいと、母さんが言つていたから。

変だなと思ったのか、お父さんみたいな髭だらけの男の人が出て

きた。

驚いてる間に足を刺した。その男の人の横から顔を出していた小さな女の子のお腹も刺した。男の人気が怖い顔をしたので、怖くて顔に包丁を突き刺した。

台所に言つて、恐怖で悲鳴をあげている女人の人もツキサシテ ホウチョウ モウイツポン ホシカツタカラ モラッタ。

二階に上がつてみると、一つだけ扉の閉じた部屋がある。ノックしてみると、開いた。

「おまえ、なんで……？」

ムカつく、コロス。コイツモ コロシテ シマオウ。
包丁は一本ある。いっぱい、いっぱい、刺してみよう。

警察の人が来たとき、僕はそいつの死体に何度も何度も包丁を突き刺していた。もう顔はぐちゃぐちゃで、誰だかわからん。もともと誰だか知らないけども。

警察の人が僕に手錠を付ける。

ボク ワルイコト シテナイヨ? タダ ミンナヲ コロシタ
ダケジャナイカ。

警察の人に連れていかれる時、僕はちょっとだけ泣いた。

母さん、殺しちゃった。もう、あえないよ……。

マダ コロシテナイヤツ イッパイ イッパイ。
イッパイ。

(後書き)

自分で思つてゐるほど病的じやなかつたかもしない。 酷評、お待ちしてい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1821e/>

ボクハアタカモフツウデアルカノヨウニ

2010年10月30日05時19分発行